

日・韓大学スポーツ選手の競技意欲に関する比較研究  
 ——柔道選手の TSMI 検査及び柔道に関する意識の差について——

河 亨柱

A Comparative Study of the Psychological Aptitudes and  
 Will-to-Compete between Japanese and Korean Student Judo Athletes

Ha Hyoung-Zoo

The purpose of this research is to clarify the psychological aptitudes of Japanese and Korean University Judo athletes concerning competition and to compare especially their will-to-competete. The subjects, 131 Japanese and 119 Korean student judo athletes, were selected from those who belong to 5 Universities which are ranked highest by their results get in the National Intercollegiate Meetings of Judo in both countries. The data were obtained by using the same questionnaires of TSMI and psychological enquetes in each groups of subjects.

The main results were as follows :

- 1) In general, between Japanese and Korean university judo athletes, there was a relative resemblance with respect to the TSMI results. Both Japanese and Korean judo athletes made lower points in TS7 (fighting spirit) and TS10 (causality reversion of effort), and made higher points in TS17 (intemperance). On the other hand, Japanese and Korean judo athletes made a difference in terms of TS4 (will-to-practice), TS6 (psychological toughness), TS9 (planning-mind) and TS11 (intellectual interest). Japanese student judo athletes make higher points in TS4 and TS11 than Korean athletes who make higher points in TS6 and TS9. Both Japanese and Korean athletes made lower points in their relation with coach ; it is necessary to make more reliable the relationship between athletes and coach.
- 2) Both Japanese and Korean judo athletes think that their country has the judo tradition and Japanese students are more sensible of it. Korean athletes are more aware of possibility to contribute to prestige exaltation of their country in the international community and are very sensitive of the national aids that will be given for them.

I. はじめに

韓国においてスポーツは、「暗黒時代」と呼ばれる日本による植民地政策の時代から現在に至

るまで、国民の高い関心の中で発展を遂げ続けてきた。1936年のベルリン・オリンピックにおいてマラソンの孫基貞選手が優勝したことは、当時の韓国国民に大きな希望を与えた。そして、

1945年に独立を遂げて後、数多くの海外留學生が帰国し新しいスポーツ技術を紹介したことは、この国のスポーツをさらに飛躍させる大きなきっかけとなった。

その後、韓国政府は「体力は国力なり」というスローガンを掲げ、体育・スポーツの新たな時代を開くことになったのである。1976年のモントリオール・オリンピックにおいて、韓国はその建国後、初めてレスリングで優勝を遂げる。また1984年のロスアンゼルス・オリンピックでは世界10位となり、前回の1988年ソウル・オリンピックでは世界4位の成績を残し、近年における競技力の向上には著しいものがある。

一方、韓国の柔道について見ると、1964年の東京オリンピックで正式な種目選ばれてから1972年のミュンヘン・オリンピックに至るまで、韓国柔道の主力選手の多くは、日本に居住する在日韓国人によって構成されるという状況が続いた。その韓国選手が初めて国際競技で金メダルを獲得するのは、東京オリンピックから17年を経た1981年の第12回世界選手権大会（オランダ）においてであった。以後、ロスアンゼルス・オリンピックでは、金2、銀2、銅1の合計5つのメダルを獲得し、さらにソウル・オリンピックでは金2の成績をおさめ、少なくともメダル獲得数においては日本を追い抜いたのである。その後、経済成長と共に国と国民は柔道の重要性をさらに認識するようになった。このように急速に発展した韓国柔道と日本柔道が次回の北京アジア大会においてよきライバルとして壮烈なメダル獲得合戦を行うことは確実である。しかし、他の国々の追い上げもすさまじく、両国共にこれまで以上の成果をあげるためには科学的な研究に裏付けられた合理的な選手の養成と指導が必要であろう。競技において、優れた成績をおさめるためには体力などの身体的要因、技術などの機能的要因と共に、それらを十分に発揮するための心理的要因が重要である。とくにこの最後の心理的要因について松田ら<sup>1)</sup>は、「スポーツ選手の心理的適性を問題にする場合、競技意欲の中核となる達成動機について検討することが重要である」と述べて

ている。

本研究は、韓国の体育・スポーツにおいて近年、特に急速な発展を遂げた柔道を対象種目とし、社会的背景が異なる日・韓両国の選手間に競技意欲（達成動機）においてどのような特徴がみられるかを調査によって明らかにし、比較・検討を加えることを目的としている。また、柔道を取り巻くそれぞれの社会的な環境について、両国の選手がどのように感じているのかを知るために、意識調査を並行して行い、検討を加えた。

## II 研究方法

### 1. 調査時期

調査は、日本と韓国共に1990年2月1日から1990年4月30日までの間に行われた。

### 2. 調査対象

調査対象は、日本の全国大会上位5大学の柔道部選手131名、韓国の全国大会上位5大学の柔道部選手119名で、各大学チームの選手の中で可能な限り、監督とコーチが推薦した優秀選手を対象に行った。

### 3. 調査内容

#### 1) TSMI (Taikyo Sports Motivation Inventory)<sup>2)</sup>

スポーツ選手の競技意欲（達成動機）の測定法として松田らによって作成されたTSMIは、競技場面におけるいくつかの心理的適性の基盤を「競技意欲」と考え、競技者の意欲を広範囲に捉え、しかもいずれの競技種目にも使用、測定できる検査である。その意味で、現在の柔道選手の心理的適性について研究する場合、TSMI調査を用いることには十分意義があるといえる。

TSMIの結果及び分析の処理は、松田ら<sup>1)</sup>の方法に従って行った。TSMIの質問項目は回答の信頼尺度(10項目)を含む18尺度、146項目からなり、これに対する回答は4件法でなされる。配点はよく当てはまる場合には4点、やや当てはまる場合には3点、あまり当てはまらな

い場合には2点、全く当てはまらない場合には1点がそれぞれ与えられた。ただし、反転項目については、これとは逆の得点が与えられた。以上の手続きによって、17の下位尺度に含まれる項目の合計点が算出され、TSMIの下位尺度得点とされる。これらの尺度得点は、高いほど、各尺度の特性が著しい傾向にあると解釈される。

TS 1. (目標への挑戦), TS 2. (技術向上意欲), TS 3. (困難の克服), TS 4. (練習意欲), TS 5. (冷静な判断), TS 6. (精神的強靱さ), TS 7. (闘志), TS 8. (競技価値観), TS 9. (計画性), TS 10. (努力への因果帰属), TS 11. (知的興味), TS 12. (勝利志向性), TS 13. (コーチ受容)の各尺度で高い得点を示した場合には競技意欲が高いと判断される。他方, TS 14. (対コーチ不適応), TS 15. (失敗不安), TS 16. (緊張性不安), TS 17. (不節制)の各尺度は、競技意欲の妨害的な側面を測定していると考えられるため、これらの各尺度得点に関しては、低い得点の方が望ましい競技適性を持っていると考えられる。

## 2) 柔道に関する意識調査

本研究においては、日韓両国の選手が柔道に関する社会的環境をどのように感じているかを知るために、「柔道に関する意識調査」と題する質問用紙を作成し、実施した。

内容は次の通りである。

- ①自分の国の柔道は伝統があると思うか
- ②自分の国の政府は柔道に関心を持っていると思うか
- ③国民は柔道に関して関心を持っていると思うか
- ④柔道によって社会的名声が得られると思うか
- ⑤学校教育の中で柔道は十分に教育されていると思うか
- ⑥柔道は精神修養に役立つと思うか
- ⑦柔道を勝利のためでなく、人格形成のためにやっていると思うか
- ⑧国威宣揚のために柔道をやっていると思う

か

⑨柔道をやるとは自分の国のためになると思うか

⑩国から経済的援助を受けていると思うか  
なお、上記の10項目についての回答形式は、「はい」「いいえ」の2件法であった。

## 4. 調査方法

調査方法については、TSMIと共に、「柔道に関する意識調査」も添付して各大学ごとの集団において一斉に調査した。この際、TSMIは「実施手引」に準じて行われ、意識調査も同時に行われた。さらに、韓国での調査において、日本のTSMI項目を韓国語で翻訳し実施したが、翻訳上、誤解される可能性がある部分は回答者が理解しやすいように配慮を加えた。

## III 結果及び考察

### 1. TSMIについて

両国のTSMI各下位尺度別の粗点合計平均及び標準偏差を表1に示した。それらの平均得点をスタナイン得点に変換したもののプロフィールが図1である。また各尺度毎に両国間の平均値の差についてt検定を実施し、その結果も表1に付記した。

図1を見てわかるように、全体的に見ると両国の選手はかなり似通ったプロフィールを示している。中でも特徴的であったのは、両国ともTS 7. (闘志), TS 10. (努力への因果帰属)において、平均的水準よりも低い得点が得られ、TS 17. (不節制)において高い得点が得られたことである。これらの尺度を解釈する場合、前者2つについては高い得点を示すほど競技意欲の高い選手であると判断される。即ち両国選手の得点から考えると、大試合や不利な状況、競り合いの場面での闘志が弱く、試合での成功や技術の向上が自分の努力の結果であると考え、傾向が低く、試合に負けた時の原因を相手の強さや、その他自分以外の条件に帰させる傾向があるということになる。これらのことは競技選手として非常に望ましくない特性を示しているが、なぜこうした結果となったのであろうか。

表1 両国における TSMI 各下位尺度別平均得点と標準偏差及び t 検定の結果

尺度名	韓国 n=119		日本 n=131		t 検定の結果 t 値(df=248)
	M	SD	M	SD	
1. 目標への挑戦	22.54	2.89	22.72	3.61	-0.43
2. 技術向上意欲	24.23	2.59	23.87	3.33	0.94
3. 困難の克服	22.41	2.62	23.47	3.48	-2.69**
4. 練習意欲	21.20	2.58	23.29	4.22	-4.65***
5. 冷静な判断	21.54	2.46	20.79	4.56	1.59
6. 精神的強靱さ	22.03	2.33	18.66	4.58	7.19***
7. 闘志	19.20	2.94	19.40	3.77	-0.46
8. 競技価値観	19.20	3.44	20.08	3.89	-1.88
9. 計画性	23.55	2.68	21.56	4.62	3.91***
10. 努力への因果帰属	19.59	2.45	18.02	4.41	3.42***
11. 知的興味	23.93	2.69	25.58	5.22	-3.08***
12. 勝利志向性	24.08	2.81	25.37	5.07	-2.44*
13. コーチ受容	18.91	1.77	17.99	3.86	2.37*
14. 対コーチ不適応	21.87	2.30	18.35	3.81	8.70***
15. 失敗不安	20.32	1.91	22.24	4.22	-4.54***
16. 緊張性不安	22.86	2.06	21.33	3.90	3.81***
17. 不節制	25.10	2.87	24.12	4.25	2.11*

\*\*\* p < .001, \*\* p < .01, \* p < .05

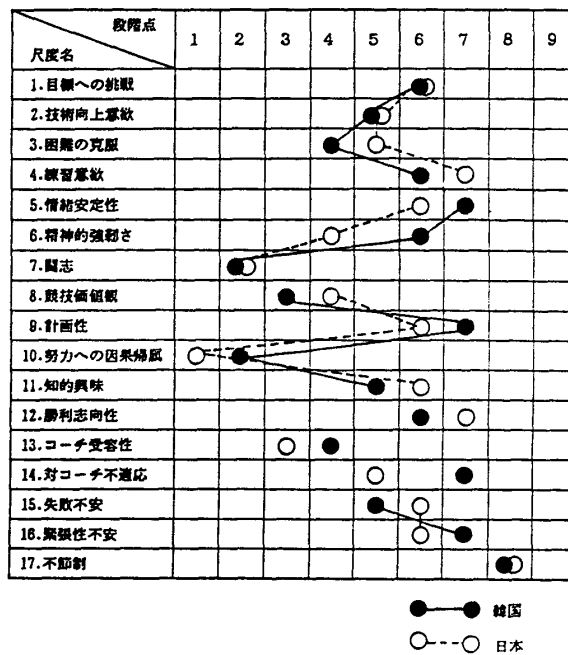


図1 日・韓の TSMI 下位尺度別段階点のプロフィール

その原因として本研究の調査対象の要因が考えられる。即ち両国とも対象は全国大会5位以内の大学の柔道部に所属する選手達であったことである。彼らは競技レベルという点ではトップに位置する選手達であり、そこに到るまでには十分に練習を積み、努力してきたと考えられる。従って努力の結果現在のレベルにまで達したことを認識したうえで、勝敗を決定する残りの要因は体格やセンス、観衆や審判といった自分の努力以外の条件であると感じているのではないだろうか。また闘志の尺度において得点が低かったことについては以下の理由が考えられる。1つは調査実施時期の要因である。即ち国際レベルのような大きな大会が間近には行われず、実際の試合場面での状況から遠ざかっているために、得点が低かったのではないかということである。また、別の視点から次のようにも考えられないだろうか。即ち柔道において有利に試合を運ぶためには闘志をあらわにするより、ある程度冷静でいる必要があると選手は感じているのではないだろうか。また柔道における闘志とは内に秘められたものであり、質問紙のようなものでは測りにくいものだとも考えられる。

以上のように一般的にトップレベルの競技選手が示すと考えられている特徴とは逆の傾向がみられたことについて、今後競技レベルや種目の特性を考慮した調査検討が必要である。

また不節制の尺度に望ましくない傾向がみられた。この理由としては、日ごろの厳しい練習や周囲の期待に対するストレスが反映していると考えられる。今後選手自身、自己管理に注意を向ける必要があるだろう。また監督やコーチは練習ばかりでなく、選手の生活習慣にも気を配る必要があるといえる。

以上3つの尺度における特徴は、両国に共通してみられたものであった。次に両国間に特に差がみられた尺度についてみると、日本選手は韓国選手よりも練習意欲、知的興味が有意に高かった。この傾向を反映するものとして競技経験年数があげられる。日本選手の平均経験年数は13.3年、韓国選手は7.5年であった。この年

数から考えると、日本選手は小学校時代から柔道を始めているのに対し、韓国選手は中学校または高校時代から始めているということがうかがえる。競技経験年数はある意味で行動の持続性を反映していると考えられる。日本選手の経験年数の長さは練習を意欲的かつ持続的にやることの現れといえるのではないだろうか。

一方、韓国選手は日本選手よりも精神的強さや計画性において有意に高い得点を示し、不利な状況、競り合い等において精神的な強さを発揮できる傾向が高く、また試合の仕方や練習について、見通しを持って計画をたてられる傾向が高いことがうかがえる。

最後にコーチ受容、対コーチ不適応の尺度についてみると、日本選手はコーチに対する信頼感や、コーチの指示への従順的な傾向が低いことがうかがわれ、韓国選手はコーチとの人間関係があまりうまくいっていない傾向がみられた。両国ともコーチと選手の積極的なコミュニケーションによって、望ましい信頼関係をつくっていく必要があるといえよう。

## 2. 柔道に関する意識調査について

図2は柔道に関する意識調査の結果を示したものである。両国選手が各項目に対し「はい」と答えた人数の百分率についてカイ自乗による検定を行った結果、項目番号①、⑧、⑨、⑩のそれぞれにおいて両国間に0.1%水準で有意差が認められた。それぞれの項目についてみると、①「自分の国の柔道は伝統があると思うか」の質問に対しては日本選手は100%、韓国選手は88%が「はい」と回答しており、両国選手とも自国の柔道に伝統を感じているが、日本選手は著しくその意識が強かった。⑧「国威宣揚のために柔道をやっていると思うか」という質問に対しては、日本選手は6.9%、韓国選手は37.5%が「はい」と答えている。さらに⑨「柔道やることは国のためになると思うか」という質問に対しては日本選手は13.9%、韓国選手においては約半数の52.1%が「はい」と答えている。これらのことは、韓国選手の、柔道やることによって国のために役に立ちたいという気持ち

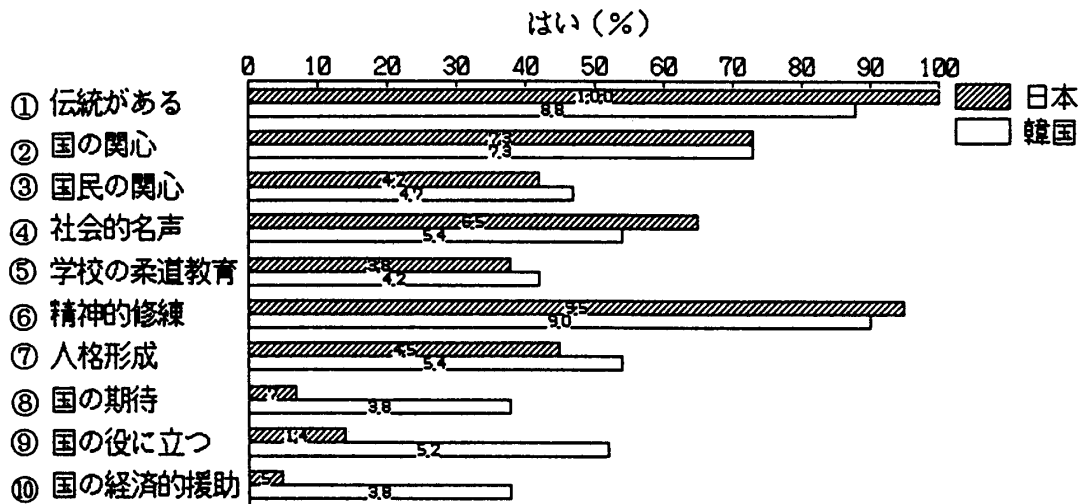


図2 日・韓選手の柔道に対する意識

(愛国心ともいえよう)の強さの現れと考えられる。そして、⑩「国から経済的援助を受けていると思う」という質問に対して、日本選手は5.3%、韓国選手は38%が「はい」と答えている。これは国家のスポーツ選手に対する経済的援助の差が意識に反映されたものであると考えられる。

#### IV 結 論

TSMI及び柔道に関する意識調査を、日・韓トップレベルの大学選手に対して実施した結果は次の通りであった。

1. TSMIについて両国の選手を全体的に比較した場合、かなり似通ったプロフィールを示した。共通してみられた特長としては、TS 7.(闘志)、TS 10.(努力への因果帰属)の尺度において平均的水準よりも低い得点を示し、TSI 17.(不節制)の尺度において望ましくない方向で高い得点を示したことであった。また両国間に差がみられた尺度は、TS 4.(練習意欲)、TS 6.(精神的強靱さ)、TS 9.(計画性)、TS 11.(知的興味)等であった。日本選手は韓国選手に比べ練習意欲や知的興味が高く、韓国選手は日本選手に比べ精神的強靱さや計画性が高かった。また両国選手ともコーチ受容や対コーチ不適応の尺度において望ましくない傾向がみられ、コーチと選手の信頼関係を高めていく必要があると考えられる。

2. 柔道に関する意識調査においては、両国選手とも自国の柔道に伝統があると思ってるが、日本選手は特にその意識が強かった。また韓国選手は日本選手に比べて柔道を行うことが国のために役に立ち、同時に国からの経済的援助も受けているという意識が高かった。

#### 謝 辞

稿を終えるにあたり、一年間の留学中、終始ご指導を賜った松田岩男教授および武田徹教授に深甚の謝意を捧げます。また本研究の調査にあたり種々のご強力を戴いた東海大学の山下泰裕助教授はじめ、調査に快く強力していただいた各大学柔道部の監督・学生諸君、ならびに中京大学体育真理学研究室の伊藤友記氏はじめ皆様方に深く感謝いたします。

#### 引用・参考文献

- 1) 松田岩男ら、スポーツ選手の心理的適性に関する研究、第1, 2, 3, 4報, 昭和55年度~57年度日本体育協会スポーツ科学研究報告, 1980~1982
- 2) 松田岩男ら, TSMI 実施手引——体協競技意欲検査——財団法人日本体育協会, 1981
- 3) 堀本 宏ら, バスケットボール選手の心理的適性, 中京女子大学紀要第20号, 1986

- 4) 西田 保, 松井秀治, TSMI からみた高校全国大会(名古屋インターハイ)出場陸上選手の心理的適性について, 陸上競技, 1984
- 5) 岡沢祥訓, トップレベルの卓球選手の心理的適性に関する研究, 総合保健体育学第6巻1号, 1983
- 6) 岡沢祥訓, 卓球選手の心理的適性に関する研究, 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告, 1985
- 7) 吉沢祥二ら, ホッケーの女子トッププレーヤーの心理的適性について, 総合保健体育科学, 第6巻1号, 1983
- 8) 遠藤俊郎ら, バレーボール選手の心理的適性に関する研究, 日本体育学会第36回大会, 1985
- 9) 久保玄次ら, TSMI の得点と競技行動に対する指導者の批評と関係, 日本体育学会第37回大会発表, 1986
- 10) 岡沢祥訓, 卓球選手の心理的適性に関する研究, 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告, 1985
- 11) 石井源信, 昭和56年日本体育協会スポーツ医・科学研究報告, No.IIIスポーツ選手の心理的適性に関する研究, 第3報, 1982